

反転授業による英文法授業の質的転換

Qualitative Transformation of English Grammar Lecture into Flipped Teaching

次世代教育学部教育経営学科

井上 聡

INOUE, Satoshi

Department of Management for Education
Faculty of Education for Future Generations

キーワード：反転授業，英文法，デジタル教材，能動的学修

要約：英文法授業における能動的学修を実現するため，本研究では，3年次配当の英文法科目を反転授業に転換し，その効果測定を試みた。解説付きの予習用デジタル教材，および，予習内容と関連付けられた授業用演習教材を開発し，15回授業を行ったところ，講義型と比べて，理解度や満足度を下げることなく，学修時間を増加させることができた。また，時間管理等の面でも一定の成果が見られたが，知識の定着に関しては，個人差の影響を受ける可能性が示唆された。

Keywords：flipped teaching, English grammar, digital materials, active learning

I. はじめに

グローバル化の進展や社会構造の変化に伴い，コミュニケーション能力や課題発見・解決能力等を育むための教育方法として，アクティブ・ラーニング（Active Learning, AL）が推奨されている。アクティブ・ラーニングは能動的学修の総称であり，教員による一方的な講義形式の教育とは異なり，学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法と捉えられている。溝上（2014）では，能動的学修を「書く・話す・発表するなどの活動への関与と，そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」ものと定義され，インプット型からアウトプット型への転換，つまり，「何を教えたか」から「何を学んだか」への質的転換が重視されている。

質的転換に関する議論で頻繁に焦点化されるのが「学修時間」である。大学基準協会（2015）は，学習しなければ学修成果が上がるはずがないという前提を踏まえ，その原因を「学生の生来のやる気のなさにあるのではなく，あまり勉強しなくても単位を取得し卒業できてしまう大学教育の在り方にある」と指摘している（p. 92）。学修時間の増加を図るうえで有効とされる教育手法が「反転授業」である。これはアクティブ・ラーニングの一種であり，「講義から復習へ」という授業形態を「ICT活用による予習から演習へ」という形態に換えたものである（河村・今井，2017）。

学修時間の増加以外にも，時間管理の促進や学力差の解消といった長所が認められているが，その一方，映像教材や活動内容の精度，ICT環境といった課題も指摘されている。また，実践報告例の多くは初等・中等教育の科目，あるいは，大学における理系科目，初年次生のアカデミック・スキル，ゼミといった演習科目に集中しており，大学の英語授業，とりわけ訳読式に陥りやすい「英文法」の講義を転換した事例は見られない。

そこで本研究では，英文法授業においても能動的学修を実現することを目的として，予習と授業を連動させた教材を開発し，授業評価アンケートや履修者のコメントに基づいて，先行研究で示された効果の検証を試みることにした。

II. 先行研究

1. 受動的学修と能動的学修

「教授・学習パラダイムの転換」（Barr & Tagg, 1995）を通して，教育目標は「何を教えたか」から「何ができるようになったか」に，すなわち，受動的学修から能動的学修に移行しつつある。溝上（2014）は，従来の講義を受動的とみなしたうえで，能動的学修を「一方的な知識伝達型講義とは相反するもの」と定義している。松下（2015）では，能動的学修の要素として，「聴く以上の関わり，スキルの育成，高次の

思考への関わり、言語活動への関与、態度や価値観の探求、認知プロセスの外化」が重視されている。小林(2017)では、能動的学修と受動的学修が明確に区別され、「聞いているだけでわくわくする、とても勉強になるような名講義もある。そういう時にはアクティブ・ラーニングが起きていると言える」という考え方が否定されている。原田(2017)は、講義の問題として、教師の話す活動がはるかに多くなっている点に着目し、講義からは低次の認知学習のアウトカムしか生み出されないと述べている。永田・林(2016)では、講義に加え、問題を解くという活動やその成果についてさえも、授業のシナリオを変えるほどの効果はないと指摘されている。

そのような知見を踏まえ、大学授業で実践される能動的学修は、「専門知識を活用して課題解決に取り組む高次のアクティブ・ラーニング」と「専門知識の定着を目的とする一般的アクティブ・ラーニング」に分けられる(河合塾, 2016)。栗田(2017)によると、高次のアクティブ・ラーニングは、初年次セミナー、演習ゼミ、課題解決型授業として随時導入されている。知識定着型の一般的アクティブ・ラーニングに関しては、理系学科での導入例が複数認められるものの、文系学科に関しては、法・経営・国際関係等の一部で実施される程度である。このような状況に対して、授業設計上の課題、とりわけ、「基本的な内容に関する共通の知識基盤を予習時に固める方法」や「授業時に知識の活用を促す方法」といった課題が指摘されている(小林, 2017)。

2. 反転授業と授業設計

反転授業はアクティブ・ラーニングの一種であり、「授業と宿題の役割を反転させ、授業時間外にデジタル教材等により知識習得を済ませ、教室では知識確認や問題解決学習を行う授業形態」(重田, 2014)と定義される。知識の伝達を授業時間外に事前に行うことにより、授業内で知識の活用に割く時間が増えることになる。Bergmann(2012)によると、早い段階で学習者の評価を行い、理解していない生徒に特別の処遇を与えることによって、全員が一定基準以上の理解を目指すことができるとされる。この場合、早い段階での評価を「予習」、特別の処遇を「授業」と捉えることが妥当である。協同学習と組み合わせることによって、「アウトプット型学習への転換、学生同士の相乗的な動機づけの誘発、学習行動の可視化、協働意識や帰属意識の高揚、時間外学習の実質的増加、学力差の

解消、時間の有効活用」(小川, 2015, p. 5)といった効果を期待することができる。

一方、反転授業の課題としては、予習用ICT教材の視聴方法や位置づけが挙げられており、寺尾(2012)は、ICT教材を活用したからと言って、それが自動的に深い学習を保証するわけではないと述べている。実際、「視聴時間が増えるほど成績が高くなる」(重田, 2014)という長所が認められる一方で、視聴意欲が学習者の自律度(吉田, 2008)や習熟度(北澤他, 2010)の影響を強く受けるため、「13分以上は長すぎる」(柴山・清水, 2015)、「短ければ短いほど良い」(Bergmann, 2012)といった指摘も行われている。予習教材の形式に関しては、数学系の科目では、解法の説明が中心となるため、音声やペン入れに基づくデジタル予習教材が、看護・保健・福祉学系統の科目では、実技指導が重視されるため、動画による予習教材が活用されているが、その一方、新たな理論を説明する際の、講義の代わりとなるような教材開発の事例はほとんど見られない。

さらに、授業設計の観点から、知識(=予習)と活用(=授業)のつながりに言及する意見もある。佐藤(2016)は、反転学習の成否を授業外学習と授業内容の関連性に置き、授業外学習を実質化できるよう、配信動画(予習教材)を見るインセンティブを明確にすべきとしている。三保他(2015)においても、反転授業の設計として、予習での内容理解と授業での認知プロセスの外化の関係が重視されている。片瀬(2016)では、そのような授業設計がなされていない場合、ただ単に協同学習を取り入れても知識の定着は促進されないとされる。奥田他(2015)においても、反転授業の仕組みや予習の重要性について事前に学習者に理解させるべきとされる。

3. 英文法授業への応用

英語教師の多くが「学修時間が不足しているにもかかわらず、授業時間内で知識の定着を補えないジレンマ」(Robb & 加藤, 2012)を抱える中、問題解決に際して、反転授業の効果(予習の強化、文法や和訳の説明時間の削減、定着のための時間確保、進度の加速化)(重田, 2014)は大きいと思われる。ただし、大学の英語授業の質的転換に関する実践報告は資格検定対策が中心であり、英語教育という文脈での検証例はほとんど見られない(馬場崎・増田, 2016)。資格検定の場合、実際の過去問や専用教材を使用できるため、予習教材の作成・使用に係る負担は比較的少ない

が、講義型授業を反転授業に転換する場合には、到達目標に基づいて、知識を理解させるための予習教材と知識を活用するための演習教材を一体化して開発する必要が生じる。その際、問題選定の技術だけでなく、「どのような形式で予習用デジタル教材を作成し、どのような方法で履修者に配信するか」というICT活用の技術も求められるため、科目担当者の負担が大きくなる。マニュアルとしては「反転授業の実施方法と事例集」(愛媛大学理学部, 2017)が詳しいが、紹介される14例はすべて理系科目に特化されており、知識伝達型の授業の転換例は見られない。予復習が一体化された、英文法授業の設計を行うことが喫緊の課題である。

Ⅲ. 研究の枠組み

1. 研究の方向性

本研究の目的は、英文法授業における能動的学修を担保し、その成果を測定することである。よって、本研究の問いを「講義型の英文法授業を知識定着型の反転授業に転換することによって、能動的学修はどの程度まで実現されるか?」とし、ふたつの研究課題(RQ1科目種による違いはあるか? RQ2履修者はどのように感じているか?)を設定した。予習教材と復習教材を連動させた授業設計を行い、授業評価アンケートの結果に基づいて、反転授業と他の科目の違いを整理し、先行研究で指摘された反転学習の効果(時間外学習の実質的増加, 学力差の解消, 時間の有効活用)について検証を行い、英文法授業の質的転換の可能性について考察を深めたい。

2. 授業概要

本研究で質的転換の対象とした授業は「上級英語文法」である。中高英語教員免許取得の支援を目的とした3年次前期配当の選択科目であるが、履修者の習熟度は幅広く、TOEICスコア900点から英検3級まで多岐にわたっている。科目の到達目標を「大学入試の文法・語法問題を解き、正答と誤答の違いを説明できること」としているため、ほぼすべての文法単元を扱うとともに、過去の大学入試問題を集めて教材を作成している。全25章で扱う単元は、動詞、基本時制、完了時制、法助動詞、態、不定詞、分詞、動名詞、関係詞、仮定法、比較、名詞、代名詞、形容詞、副詞、接続詞、前置詞、疑問・否定・倒置・強調、まとめとした。すべての章を4頁立てとし、授業用2頁(例題)

と宿題用2頁(類題)に分け、類題は例題から6割、応用・実力問題として4割程度出題した。下記の表1はこの2年間の授業設計の違いをまとめたものである。

まず、2017年度の授業形式について述べる。履修者は3年生のみ15人であった。初回の授業はオリエンテーションとして、授業の進行方法について説明を行った。その際、毎回2章分の例題を事前に解いてから授業に参加すること、授業で解説を聞いた後、宿題として2章分の類題を解き、答え合わせを済ませること、および、次回の予習として2章分の例題を解いておくことを伝えた。履修者はすべて指示通りの活動を行ったが、宿題のチェックを行ったところ、正解率が極めて低いことが判明した。授業中の態度、発問への応答、ノートテイキングの内容について不備はなかったが、履修者の大半が「授業の解説通りに解くことが難しい」という反応を示したため、履修者との協議を経て、以降の授業では、毎回の冒頭に宿題の解説を加えることとした。その結果、シラバスの授業計画とは異なり、指導範囲の半分を終えるにとどまった。知識の習得を促す方法と授業進度というふたつの課題が残された。

表1 授業の構成

	2017年度	2018年度
類型	・講義型授業	・反転型授業
例題	・予習 ・授業で解説	・予習(デジタル化) ・授業では質問受付
類題	・家庭学習 ・授業で解説	・授業で演習 ・授業で解説
進度	・13章で終了	・全25章終了
講義	・授業の大半	・授業の1/3程度

2018年度については、前年度の反省を踏まえ、授業設計を一新した。まず、予習用の例題の頁を解説入りのデジタル教材とし、予習用に毎回2章分を配信した。デジタル化のツールとしては、iPadの動画編集アプリ(Explain Everything)を採用した。愛媛大学理学部の事例集(2017)を参照し、PDF化した教材をアプリで読み取り、ペン入れと解説の音声を録音し、Dropboxに戻したのち、学内サーバを経由して、履修者に配信した。動画時間は2章分で計30分程度とした。開始当初はデジタル化から配信までに2時間ほど要したが、最終的に30分ほどで済ませることができた。

履修者は2章分の例題を解いた後、デジタル教材を用いて答え合わせとノートテイキングを行った。授業の冒頭で質問を受け付け、その後、前年度まで宿題として使用していた類題（2頁）の演習・解説を2章分を行った。90分の時間配分が過密であり、小テストの実施は不可能であった。2018年度の履修者（14人）の習熟度も例年通りばらついてはいたが、2017年同様、予習（答え合わせとノートテイキング）はほぼ確実にこなされていた。演習に取り組む態度や解説を聴く姿勢に特別な問題はなく、15回の授業を通して、すべての章の指導を終え、反転授業による「授業進度を速める効果」（重田，2014）の確証を得ることができた。最終授業において、授業評価アンケートへの回答を促すとともに、本授業に関する独自のアンケート調査を行った。

3. データと分析手法

RQ1では反転授業の効果を検証するために、授業評価アンケートを使用し、「経年変化」と「科目種の違い」の観点から分析を行った。「経年比較」では、「上級英語文法」の2017年度（講義型）と2018年度（反転型）の違いについて、「科目種の違い」では、2018年度における「上級英語文法」（反転型）と他の科目種（講義型、演習・実習型、語学、留学生用日本語）の違いについて比較を行った。調査項目は①主体性、②学修時間（2018年度から採用）、③知識・技能、④シラバスの精度、⑤理解度、⑥説明、⑦熱意、⑧満足度とした。平均値以外の統計量が公開されていないため、4件法で回答された数値の平均値に基づいて分析を行うこととした。アンケート実施方法やデータサイズの問題（2017年度：紙媒体・15人、2018年度：電子化・14人）があるため、妥当性や信頼性の問題はクリアされていないが、筆者の省察を加えつつ、考察を深めることとした。

RQ2では履修者の意識を通して、反転授業の特徴について分析を行った。独自で採ったアンケートでは、「事前予習」「有用度」「メモ」「定着」について4件法で回答を求めるとともに、「使用方法」「反転授業の長所と短所」「他科目への応用の可能性」「要望」について、自由筆記式でコメントを求めた。データサイズは小さいが、履修者全員が前年度の筆者の講義型授業（英語文法）を履修しているため、彼らのコメントの質的解釈を通して、反転授業の特徴を明確化することが可能になると考えた。

IV. 結果と考察

1. 科目種による違い

(1) 講義型と反転型の違い

本節では「科目種の違い」について、ふたつの観点から考察を行う。まずは、授業アンケートの結果に基づき、2017年度（講義型）と2018年度（反転型）の違いを示す図を作成した（図1）。

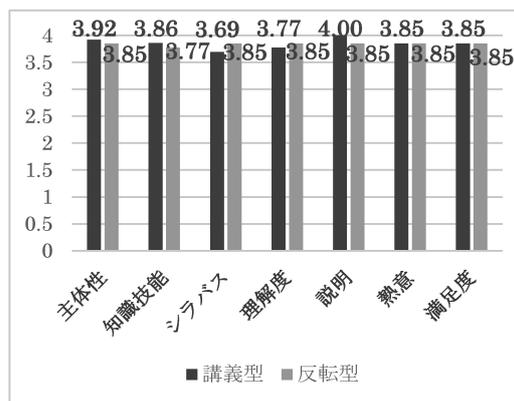


図1 経年比較（講義と反転）

履修者の属性は異なるが、学習内容と使用教材は同じである。また、すでに述べたように、2017年度が指導範囲の半分で終わったのに対して、2018年度はすべての範囲を網羅できた。講義（2017年度）だけを見ると、シラバス（3.69）が低くなっており、当初の計画通りに進まなかった影響が反映されている。ただし、数値は全体的に高く、授業計画の変更による悪影響は出ていないようである。一方、反転型（2018年度）については、数値（3.85）が全体的に揃っている。安易に回答している可能性は否めないが、履修者の意識が高いレベルで統一されていると解釈することもできる。下記のリスト（表2）は、講義と反転の数値の差に着目して、その特徴を要約したものである。

表2 講義と反転の違い

差	項目
講義>反転	主体性、知識・技能、説明
講義<反転	シラバス、理解度
講義≒反転	熱意、満足度

それぞれの差異は微々たるものであるため、表2が講義と反転授業の違いを明確に示しているわけではないが、講義が反転に勝った項目（主体性、知識・技能、説明）については、解説重視の授業運営の効果が示されている。予習や宿題の解説に際して、理解度を

確認しつつ、丁寧に説明し続けたことによって、コミュニケーションの量が十分に確保され、双方向性が高められたことが推測される。一方、反転が勝った項目として、「シラバス」は予想通りであるが、「理解度」は意外であった。説明時間が全体の1/3程度に縮小されたにもかかわらず、理解度に悪影響が出なかったことになる。これは、「熱意」と「満足度」についても同様である。反転授業の導入以降、同じ説明を繰り返すことがなくなり、ポイントを絞った説明に専念できるようになった。文法説明が簡素化され、板書量が減ったにもかかわらず、理解度、熱意、満足度といった項目に影響が出ないのであれば、進度が速くなった分だけ、講義よりも反転授業の方が効果的であると言える。主体性が下がったのは、予習を義務付けられたことへの反動であろう。

(2) 科目種全般における違い

では、引き続き、図2に基づき、2018年度科目を対象として、講義系、実技・演習系、英語系、日本語系科目との違いについて考察を行う。上図の分類は、本学の便覧に記載されている科目種に応じて行ったものであり、科目個々に調査すれば、反転授業に近いものが含まれている可能性は否めない。また、特定の14人が履修した単独の反転授業科目（上級英語文法）と他の科目種の平均値を比べることへの妥当性の問題が残るが、大学授業の質改善の糸口を掴むための参考資料と位置付けたい。

目視レベルではあるが、反転授業の数値はいずれも高くなっている。また、5種の棒グラフによる山の形状に類似性（反転授業≧日本語系>実技・演習系>英語系>講義系）が見られる。反転授業の特徴として顕著なのは、先行研究と同様、学修時間に大きな伸びが認められたことである。質問紙の選択肢から考えると、ひとりあたり平均2時間程度の事前学習が行われ

たことになるため、大学教育が抱える問題点を改善する可能性が見いだされたとと言える。ただし、さらに高い学修時間を示す科目（日本語系）も存在するため、反転授業という方法論だけに特化して考えるのは控えるべきであろう。

次に、他の科目種に関して考察を行う。日本語系の数値の高さについては、留学生の目標意識の高さが反映されていると言える。日本語能力検定はもちろん、日本での就職を視野に入れていること、さらに、目標達成のためのカリキュラム・マネジメントの影響と考えられる。実技・演習系の数値についても、到達目標が明確であり、授業自体がアクティブであることの影響であろう。「スキル」という点では、実技・演習系と英語系は共通しているはずであるが、図を見る限り、英語系の数値は低い。熱意と説明の数値が比較的高くなっているため、アウトプットよりもインプット中心の授業になっている可能性が伺える。講義系科目の数値に関しては、全般的に低く、受動的学修の影響が示唆されている。

以上、検定等を行っていないため、信頼性に欠ける結果となったが、反転授業の効果としては「学修時間の増加」を、受動的学修の課題としては「到達目標の明確化」や「アウトプット型への移行」を読みとることができた。

2. 反転授業の特徴

次に、授業最終回で採ったアンケートの結果に基づいて、反転授業の効果について検証を行う。次頁の図3は「事前予習」「デジタル教材の有有用度」「予習時のメモ」「知識の定着度」の状況を示したものである。

データサイズは小さいものの、「デジタル教材への評価は高いが、予習の精度や学修成果にはばらつきが生じている」という傾向が読み取れる。予習に関するコメント（難しかった／正直、半々の確率／1回忘れ

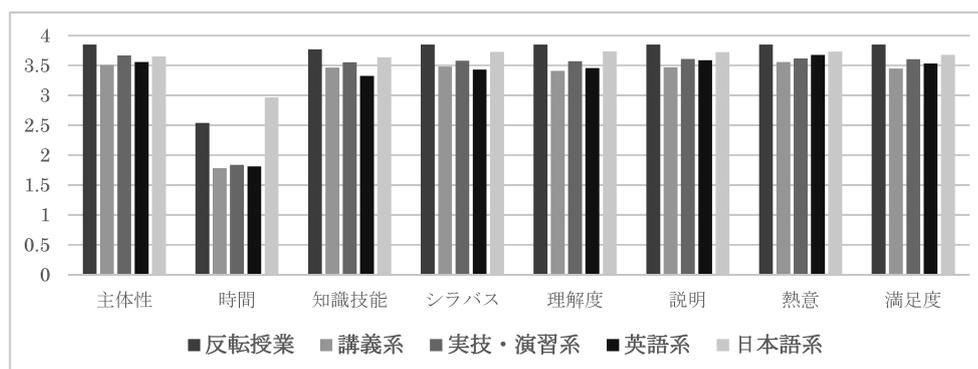


図2 科目種の比較

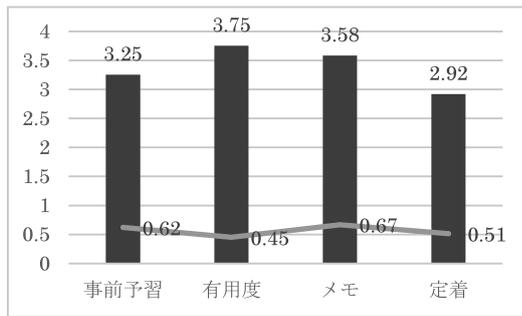


図3 反転授業の印象

たことがある／演習後に事前予習の甘さに気づいた／やらなかったこともある／予習しておかないと理解できないことがわかった)からは、予習の意味合いは理解されているが、全員が規則正しく実行したわけではないという状況が読み取れる。

デジタル教材の有用度に関するコメント(自分のタイミングで使える／復習としても使える／何度も見られる／時間のある時に見られる)からは、先行研究で示された「時間管理」の効果が体感されていることがわかる。メモに関するコメント(すべてメモを取った／ほぼメモした／映像で表示されたことはメモした／難しそうなところはすべてメモした)からは、メモの質・量に個人差があること、特に、音声情報のみの場合、メモされにくいことが示唆されている。定着に関

1. 映像教材の使用方法
空きコマ／空いている時間／シャトルバスの中／自習室／家
2. 反転授業の利点
予習で思い出せる／考える癖がつく／授業を2回受けた気分になる／難しいところが先に分かる／整理・定着の時間が増える／授業で復習できる／深く学べる／予習で分からなくても授業でカバーできる／自分の好きなレベルで学修を進められる
3. 反転授業の問題点
予習していないと授業が苦痛／クラス内の意識の差が心配／予習しない人には無駄／とにかく時間がかかる／予習しても分からない問題もある
4. 反転授業の活用の可能性
教員次第／教科による(特に数学)／就職支援の講座で活用してほしい／予習のある授業
5. 反転授業への要望
映像教材の文字の大きさ／BGM／確認テスト

図4 コメントの抜粋

するコメント(難しくて整理できない単元もあった／整理はできたが確認ができていない／定着よりも整理を優先したい／部分的には定着した)からは、教材で扱った問題の難度がやや高く、定着には至っていないことが示唆される。デジタル教材を軸とした授業設計の有用性が共有されたことによって、知識の整理は促されたものの、予習の精度や定着度が個人差の影響を受ける傾向が示されたことになる。

次に、アンケートで採ったコメントについて解釈を行う。図4はコメントの一覧である。

「使用方法」に関するコメントを見ると、履修者が時間や場所をうまく活用していることから、デジタル教材の利便性の高さが伺える。「利点」に関するコメントからは、予習と復習が密接に関連付けられたことによって、深い学習に繋がった状況が読み取れる。「問題点」に関するコメントからは、到達目標のレベルに対する個人差の存在が示唆される。「活用の可能性」に関するコメントからは、さまざまな授業に適用する可能性とともに予習との連携の必要性が示唆されている。「要望」としては、教材内容に関するもの(文字のサイズ)と理解度確認に関するもの(確認テスト)が出された。ノートパソコンやタブレットの使用によって文字の視認性を上げることは可能であるが、現代の学生の特質を考えると、スマートフォンの使用に伴う視認性の低さについては、ある程度まで許容せざるを得ないであろう。確認テストについては、教材の問題量を減らし、授業時間にゆとりを持たせ、形成的評価として定期的に組み込むべきであろう。

以上、反転学習に伴い、履修者の時間管理が捗り、予習と復習の連動によって学びが深められる可能性が示唆された。音声解説やペン入れといった工夫によって、予習段階において双方向性が高められたことが推測される。ただし、提供する学習の質・量が履修者のレベルを超えた場合には、確認テストや協同学習の実施を視野に入れるべきであろう。

V. おわりに

1. RQのまとめ

本研究では、従来講義型であった英文法授業を反転授業に転換し、その効果の検証を行った。RQ1では、さまざまな科目種との比較を行ったが、授業進度が速くなったにもかかわらず、理解度、熱意、満足度等への悪影響が出ることはなく、むしろ、現在の大学教育が抱える「学修時間」という問題を改善する可能性が

示唆された。RQ2においては、履修者へのアンケートをもとに、反転授業への意識について調査を行った。その結果、先行研究で示された通り、時間管理の効率化や深い学習が促進される傾向が読み取れた。ただし、扱う問題の質・量によって、予習の精度が損なわれる可能性も示唆されたため、協同学習や形成的評価を定期的に組み込み、履修者の自己調整力を高める必要性が課題として残された。

2. 教育的示唆

知識習得型の反転授業を実践した結果、先行研究で示された効果として、「時間管理」、「学習時間の増加」、「学力格差の解消（深い学び）」という効果を体感することができた。最も印象的であったのは、デジタル教材が「隙間時間」に活用されていたことである。スマートフォンの使用を通して、「いつでもどこでも」学習できるスタイルが現代の大学生に好まれ、そのことによって彼らの主体性が促進される可能性が示唆されたことになる。また、授業を演習中心に進めることができたため、授業終了後に感じる疲労感は従来よりも緩和された。さらに、授業中黙々と演習に取り組む姿を観察することで、能動的学修の本質を問い直す契機となった。今後、反転授業の導入を進める場合、その成否は授業設計にかかっており、以下の3点が鍵になる。

1点目は教員のICTスキル、とりわけ、デジタル教材作成・配信に係る技術である。筆者はiPadアプリを使用し、自身の音声解説を交えてデジタル教材を作成したが、そのような技術を習得するのに3か月ほど要した。ネット上で検索できる事例集は役に立ったが、実際にはICT活用の経験値の高い教職員の助言が有用であった。学内サーバを用いた配信方法に関しても同様であった。デジタルデバインドの問題を解消するうえで、スキル習得を促す研修会や勉強会の開催に加え、気軽に協働できる体制をつくる必要がある。

2点目は教材作成の観点である。本授業では英文法の大学入試問題を素材としたが、対象が何であれ、予習教材、授業教材、小テスト、定期試験で扱う設問には一貫性が求められる。講義解説のためのスライドの作り込みに係る労力は、逆向き設計のもと、予習・復習教材の一体化作成に注がれるべきであろう。特に、予習用デジタル教材に関しては、視聴時間への配慮とともに、双方向性が担保されるべきである。

3点目は授業実践の事例報告の積み重ねである。現在、日本の大学における反転授業の実践報告例は初年

次セミナー、理系科目、看護・保健系科目に偏っており、知識習得型の文系科目への転換例はほとんど見られない。筆者の周囲にも「反転授業は理系科目特有のもの」との認識を持つ教員が多く見られる。すべての科目の授業方法を変える必要はないが、主体性の改善に取り組むのであれば、複数科目でプロジェクト化を図り、成功事例や失敗事例を共有することが重要である。今後、学生の視点に立ち、「何を学んだのか」、「何ができるようになったのか」という観点から授業の質を転換することが不可欠である。

参考文献

- 馬場崎賢太・増田由香：大学英語における反転授業の導入と学習効果，広島修道大学論集，57（1），109-113，2016.
- Barr, R. B. and Tagg, J.: From Teaching to Learning: A New Paradigm for Undergraduate Education, *Change*, 27, 13-25, 1995.
- Bergmann, J., & Sams, A.: Flip your classroom, Reach every student in every class every day, *International Society for Technology in Education*, 2012.
- 大学基準協会：内部質保証ハンドブック，ヨシダ印刷株式会社，2015.
- 愛媛大学理学部：反転授業の実施方法と事例集
Retrieved from http://www.sci.ehime-u.ac.jp/EL_HP/files/2017-flip-class-manual.pdf
- 原田信之：学習に何が最も効果的か：メタ分析による学習の可視化，あいら出版，2014.
- 片瀬拓弥：反転授業後の記憶保持と感想文内容の関連性に対するテキストマイニング分析，清泉女学院短期大学研究紀要，35，12-21，2017.
- 河合塾：大学のアクティブ・ラーニング：導入からカリキュラムマネジメントへ，東信堂，2016.
- 河村一樹・今井康博：大学における反転授業，大学教育出版，2017.
- 北澤武・永井正洋・上野惇：大学情報教育のブレンデッドラーニング環境におけるeラーニングシステムを用いたフィードバックの効果，日本教育工学会論文誌，34（1），55-66，2010.
- 小林昭文：アクティブラーニング入門，産業能率大学出版部，2017.
- 栗田佳代子：インタラクティブティーチング，アクティブラーニングを促す授業づくり，河合出版，2017.

- 松下佳代：ディープ・アクティブラーニング，草勁書房，2015.
- 三保紀裕・本田周二・森朋子・溝上慎一：反転授業における予習の仕方とアクティブラーニングの関連，日本教育工学会論文誌，40，161-164.
- 溝上慎一：アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換，東信堂，2014.
- 永田敬・林一雅：大学における反転授業，東京大学出版会，2016.
- 小川勤：反転授業の有効性と課題に関する研究：大学における反転授業の可能性と課題，山口大学大学教育機構，大学教育，12，1-9，2015.
- 奥田阿子・三保紀裕・森朋子・溝上慎一：新入生を対象とした上級英語クラスにおける反転授業の導入と効果の検討，長崎大学を事例として，京都大学高等教育研究，21，41-51，2015.
- Robb, T. N., & 加藤まきみ：授業時間外の学修時間の増大による英語力の向上，大学教育と情報，4，17-19，2012.
- 佐藤広志：大学における反転授業の可能性：学習時間を再設計する方法論として，関西国際大学研究紀要，17，167-178，2016.
- 柴山紗矢香・清水克彦：高等学校数学科・情報科における反転授業の指導法の検討，数理解析研究所講究録，108-116，2015.
- 重田勝介：反転授業ICTによる授業改革の進展，情報管理，56 (10)，677-684，2014.
- 寺尾敦：ICTを活用して深い学習を支援する，コンピュータ&エデュケーション，33，28-33，2012.
- 吉田晴世：ICTを活用した外国語教育，吉田晴世・松田憲・上村隆一・野澤和典（編）外国語教育・学習モデル，10-34，東京電機大学出版局，2008.